

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 4 年 9 月 16 日

氏名 中村 優

所属 基礎教育学 コース

指導教員名 小玉 重夫 教授

1. 研究課題 教育における「国家—市民—道徳」—高坂正顕の思想に着目して—

2. 計画する学術活動の実施期間 令和4年9月5日 ~ 令和4年9月12日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

4. 学術活動

- 国外 国内
- ①英語論文公表
- ②研究科教員の研究プロジェクト参加
- ③フィールドワーク
- ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
- ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
- ⑥研究指導委託
- ⑦留学
- ⑧国際研修
- ⑨国際インターンシップ
- ⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	⑧
<p>プログラム名「スウェーデン王立工科大学(KTH)での体験活動 日本語授業サポートと学内企業訪問」 (東京大学本部社会連携推進課 活動推進チーム主催の体験活動プログラム)</p> <p>派遣先機関：スウェーデン王立工科大学 国：スウェーデン 都市：ストックホルム</p> <p>派遣期間：令和4年9月5日 ～ 令和4年9月12日(8日間)</p> <p>プログラム概要：スウェーデン王立大学(以下KTH)での活動を主軸とし、スウェーデンに対する理解を深め、グローバル意識を育てる機会を提供する。KTH学生との国際交流、KTHでの講義、ノーベル賞博物館の見学など多角的な視点からスウェーデンの現状を学び、多様な価値観に触れることを目的とする。</p> <p>【活動内容】</p> <p>1) 国際交流 ・スウェーデン王立工科大学(以下KTH)の日本語授業サポートやランゲージカフェなどのサポートによって、学生同士の交流を深め、国際交流における日本語教育の意義やあり方などについて考える機会とする。また、異文化理解を深め、多様性を受容する機会を得る。</p> <p>2) 大学講義を受講 ・KTHでの講義に参加、留学の意義について考え、自己研鑽の楽しさを体験する。</p> <p>3) スタートアップ企業見学 ・KTH内にあるスタートアップ企業を訪問し、新ジャンルでのビジネスの立ち上げなどの現地事情を学び、視野を広げる。</p> <p>4) ユネスコ世界遺産の Skogskyrkogårde 訪問/ノーベル博物館見学 ・ユネスコ世界遺産の Skogskyrkogårde 訪問およびノーベル博物館の見学を通じ、自然科学と文化についての知識を深める。</p> <p>【日程】(下線部は計画書からの変更・追加点)</p> <p>9/5(月) スtockホルム(アランダ空港)着 ※出発日は9/4(日) KTHキャンパスツアー、翌日以降の予定の打ち合わせ</p> <p>9/6(火) KTHで現地の学生との交流、大学での講義受講 ・ランゲージカフェ(日本語)への参加 ・大学講義(講義概要：英語によるアカデミックライティング)受講</p> <p>9/7(水) 大学での講義受講、研究室見学、懇親会参加 ・ミクロ、ナノ研究室見学 ・大学講義(講義概要：VR、ARを用いた制作(グループワーク)) ・スウェーデンの学生を交えた懇親会(8号館11階)</p>	

<p>9/8 (木) KTH で日本語授業サポート、IT 企業見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Fur Hat Robotics (KTH の学生がスタートアップした IT 企業) 見学 ・KTH Innovation (学生のスタートアップを支援するセンター) 見学 ・日本語授業サポート (初級、中上級の 2 クラス) <p>9/9 (金) <u>Vasa 博物館などの見学(KTH の学生によるツアー)</u></p> <p>9/10 (土) <u>ユネスコ世界遺産の Skogskyrkogårde 訪問 (KTH の学生によるツアー)</u></p> <p>9/11 (日) <u>ストックホルム (アーランダ) 発</u></p> <p>9/12 (月) <u>経由地 (タイ、バンコク、スワンナプーム国際空港) 着 ※帰国日は 9/13 (火)</u></p>
--

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2 つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

上記の活動の目的は、「スウェーデン王立工科大学(以下 KTH)の日本語授業サポートやランゲージカフェなどのサポートによって、学生同士の交流を深め、国際交流における日本語教育の意義やあり方などについて考える機会とする。また、異文化理解を深め、多様性を受容する機会を得る」ことであった。この目的は、教育創発国際研究がその趣旨に掲げている「教育分野における国際的リーダー人材の育成」に見合っていると思われる。

また、学術活動としては、海外における「日本語教育」の現状を知ること、また、高等教育の支援体制がどのようなものになっているのかといった点において成果が得られたといえる。

前者については、9/8 (木) に行われた日本語授業のサポートにおいて成果が得られた。授業の内容から、初級が「いる、ある」の使い分け、中級が「してください、しないでください」、さらに条件「と」(例文、春になると桜が咲きます。)の部分をサポートした。基本的に、例文をたくさん発音していく形式で行われ、ニュアンスや意味の確認を英語を用いてサポートするというのがサポートの概要であった。まず、日本語教室の授業をとる生徒は、日本に対しての何らかの興味があることが伺えた。それは特に、過去に日本語教室の授業を受けていた生徒との交流で分かったことであるが、COVID-19 の影響が世界中に広がる前は、かなり多くの生徒が日本語教室の授業を受講し、日本に訪れていたということだった。今回も、自己紹介をする中で「昔日本にいったことがある」「日本でアルバイトしたことがある」あるいは「日本のゲームが好きだ」など、日本に関心をもつ学生が多くいた。そうした興味は、授業で使用している教材への関心に留まらず、そのとき起きているできごと 1 つ 1 つに「もしこれを日本語で言うならばなんと言うのか」や、「条件の『と』と『ば』『たら』『なら』にはどのような違いがあるのか」という日本人が普段意識しないような使い分けについてまで質問するといった、熱心な姿勢から伺うことができた。KTH は東京大学工学部の日本語教室の協定校ということだったが、同じような協定校はたくさんあるようで、それらの違いについても非常に気になった。

後者の高等教育の支援体制であるが、学部生、修士学生、博士学生とそれぞれに対して、日本よりも圧倒的に支援体制が整っているように感じた。まず、学部生に対しては、月 15 万円ほどの奨学金が与えられ、そのうち 4 割は返還不要、さらに残りの 6 割にも利子は高くつかないという、日本では類を見ない支援体制であった。修士学生は、寮などの住居費が支援されるようであった。博士学生は、給料が発生する点が日本と大きく違い、日本の博士課程学生が、奨学金を得るために選考にかけられ、さらに奨学金や研究奨励費を受け取ると報酬制限がかかることについても、特異であるとして驚かれた。というのは、IT 企業訪問での成果にも入ってくるが、工学系の学生は、自身の研究をしつつ、それとかんれんのあるスタートアップ企業に参加したり、あるいはそれを自身でスタートさせたりすることで、

給与を得ているからであり、それが多くの人によってなされているからである。日本ではそれは「研究に専念できていない」という理由で制限されることが多いが、分野によっては本当にそうなのか、さらにそれは本当に学生のバリエーションを高める最善の策なのかといった視点で見つめ直すことが必要なのではないかと感じた次第である。

以上のように成果として、邦外における日本語教育の意義やあり方について実体験をもとにした示唆が得られ、さらに高等教育を支える環境についても追加で示唆を得ることができた。この成果は、外国語学習によって学習者が「国家—市民」あるいは「国家—道徳」の枠組みをどのように相対化し、「市民—道徳」との緊張関係を露わにしていくのかについての様相を看取ることにつながっており、ゆえに申請者自身の研究課題に接続されていると言える。つまり、日本あるいは日本語という関心によって集まった学生たちは、それにより1つの集合体を成すのであり、そこにはたとえばコンピューターサイエンス分野は日本が世界的に秀でているため、将来の就職先の選択肢として、という日本を「国家」という目線で評価することを日本語学習の動機にしている場合も存在することは確かだが、それ以上に日本という他国に思いを馳せる一市民として、日本人を寛容に歓待し、スウェーデンでの滞在を充実させてほしいという一市民としての道徳をもった集合体であったのではないかと思う。

裏を返せば、日本において「国家—市民—道徳」の緊張関係を考えるときに、国際的な競争力や国家の発展といった題目に縛られた動機を意識しすぎるのではなく、上記のように日本に思いを馳せていたり、あるいは逆に日本人が思いを馳せていたりする「世界」に対峙し、「もっと交流したい」「もっと世界の「どこそこ」といった具体的な場所で活躍してみたい」といった、日本という「国家」の外にある動機から海外に飛び出し、それから帰って国際的に活躍する人材がそこから生まれるかどうかを考えることが大事ではないかと思った。今回は、「日本語教育のサポート」という名目で、つまり日本という「国家」の外にある動機で海外に飛び出したが、そういった思考のもとで派遣プログラムを建てていくことと、交換留学などの留学支援を両輪で充実させていくことが大事ではないかと感じた。